

和・思いやり・ホスピタリティの日本語

—日本語教育から「日本」を眺める—

李 徳 奉*

1. はじめに

現代の多くの外国語教育が目指している「多文化間共存」という理念を実現するためには、それにふさわしい言語文化的特徴をそれぞれの言語から見つけ出し、今後の外国語教育に活かして行くべきであろう。

これからの日本語学習者には、異文化間接触機会の増加に備え、文化間の摩擦を解決する能力と異文化理解を基に他の文化圏との円滑なコミュニケーションのための態度や能力、文化間ビジネスの担い手としての能力などが求められている。すなわち、外国語学習者は、単なる言語記号の置き換え能力の習得に止まらず、文化間交流の架け橋役や文化間ビジネスでの即戦力として期待されるわけである。多くの場合、外国語教師や学習者は、自分や自国の利益のための学習動機が強いだけに、異文化間の「和」の実現に役立てるような外国語教育の問題は、ただでは実現できそうもない。にもかかわらず、この問題が大事なのは、言語教育を通じて自他の行動様式および言語行動を理解することこそ真の多文化間コミュニケーション能力に繋がるからである。

日本と韓国は、似たような集団社会の地域に属しながら、その行動文法には相当の違いが見られる。一方では、村中心の共同体の論理である「和」が重んじられており、一方では、血縁社会中心の共同体の論理である「孝」が重んじられている。

日本のように自然災害型地域では、村共同体中心の行動論理が形成されがちで、韓国のように2千年間に1千回以上の戦乱を経験している戦乱災害型地域では血縁社会中心の共同体論理が形成されがちであろう。

「和」は、怨に発する横の論理で、「信義」が問われがちであり、「孝」は、縦の論理で、血縁関係における「情」が問われがちである。このように似たような集団主義社会においても、それぞれ育まれてきた文化行動の基準にずれがあるので、文化間のコミュニケーションを円満に行うためには、それぞれの行動基準への理解が求められる。

本稿では、長い間日本という共同体形成の手段として用いられてきた日本語の言語文化に含まれている共同体の論理を取り出し、その特徴を日本語教育に活かすことについて考えてみたい。

2. 「和解」への貢献

Schutzは、集団行動は、他者に対する基本的対人関係欲求、すなわち、包含 (inclusion)、統制 (control)、愛情 (affection) の欲求により決まると言っている。包含とは所属の欲求であり、統制とは、集団により他者を統制したり統制されたりする個人の欲求があり、愛情とは集団構成員どうしをつなげる情緒的結合の欲求である。Schutzは集団の形成や発達はこれらの欲求を互いに満たせるための構成員どうしの調和 (compatibility) の必要性を強調している。¹⁾ 言い換えれば、集団に属する人間がそれぞれの欲求を満たしていくために

* 同徳女子大学校教授

は、集団構成員どうしの調和としての「和」を保つことが求められるわけである。「和」を求める強度の差はあれ、いずれの集団社会も「和」を保つための他者認識の文化的基準が設けられているわけで、韓国の場合「易地思之」が、日本の場合「思いやり」が挙げられる。このような行動基準は、長い歳月に亘って文化的に育まれてきただけにそれぞれ特殊性があり、異文化間に適用するには十分な理解や調整が求められる。とりわけ、現在のような地域の共生共栄を目指した地域共同体づくりが流行っている時代には、地域内異文化間の「和」を保つための行動基準の共有が求められる。同一地域内の国々の間では関係史上、いざこざの歴史に絡まれている場合が多い。そのゆえ地域の構成単位どうしの「和解」こそ地域の「和」を実現するための第一歩と言えよう。地域内「和解」は、何よりも円満なコミュニケーションに基づくもので、その手段となる「外国語教育」の重要性が問われている。すなわち、地域の共生・共栄・平和を保つための基本的パラダイムとして「和」の実現に役立つ外国語教育の実現が求められるわけである。とりわけ、日本社会において最も強調されている「和」という理念は²⁾、集団社会の秩序を保つ戦略としての意味合いで考えると、地域内の「和」および世界の「和」まで広げられる普遍的価値となる。

日本語には、「和」の特徴を帯びた機能が多く見られる。たとえば、あいづちなどで話者を助ける積極的な聴者の役割や間接的言い回しなどから「和」の実現に有効な機能が少なくない。本稿では、このような機能を「ホスピタリティ的機能」と呼びたい。

本稿では、社会的「和」の実現のための韓日両国の文化的基準を比較することにより、異文化間「和」のあり方について考えて見たい。

3. 「易地思之」と「思いやり」の他者認識

韓・日ともに「和」の基準の成立に影響しているのは、儒学の「恕」によるものと知られているが、その解釈には相当な違いが見られる。

朝鮮の儒学者李退溪（1501-1570）は、「恕」の道徳を「己所不欲、勿施於人」すなわち自分が求めないことは人にも求めるべからずと言い、自ら「敬」の心を保つことを教えている。この教えこそ韓国の社会で言われている「易地思之」の意味を生み出す。すなわち、自分の立場から他者の立場を思い、自分でいやなことは相手にもさせないということである。このように他者を自分と同一視することにより「和」を成すことは、他者を自分の中に収めることであり相手との距離を自ら縮めることになる。このような和の基準は、血縁中心の内の社会では、他者との距離がなくなり他者への相互依存度が高くなったり、自分の思い込みに陥り「善は急げ」式の自分よがりの判断や価値を他者に強要したり、他者の行為に対して口出ししがちな副作用さえもあり得る。血縁的な内の社会において生じるこのような自己中心的傾向は、異文化間においては李退溪の言う「敬」の念を取り返すことにより補うことができる。

一方、日本の場合、伊藤仁斎（1627-1705）は「恕」の解釈において、「敬」の念を自分で保つものとしてではなく、何よりも人の立場を計りそれに自分を合わせ、他者が望まないことは行うべからずものと解釈し、他者に誠を尽くす「誠」の儒学を成立させる³⁾。すなわち日本的「恕」の道徳として「思いやり」を成立させたわけである。すなわち、他者の立場から他者を思い、他者に合わせて「和」を成す内の社会の論理なのである。しかし、このような「思いやり」的基準は、自他を区別し過ぎ、相手に気を使うと共にできるだけ自分を押しさえ自分の意見を出さなくなり、他者との一定の距離を保つことが求められる。意見を出して積極的に調整するより周りの雰囲気窺ったり、

建前を重んじ、自分をそれに合わせようとする。「和を以って貴しとなす」を守ることが集団の規範となり、個（私）を滅して集団全体（公）を重んずる日本的行動様式になる⁴⁾。その結果、「周囲の人びとの動きを注意深くうかがいながら自己の行為を律して行くという<他者志向型>、あるいは<大勢追随型>という日本人の行動様式の特徴⁵⁾に近づくのである。このような日本的「思いやり」は、村型社会における内の社会でのみ働く倫理の故、異文化間という外の社会に適用するには相当の調整が求められる。

「易地思之」や「思いやり」のような他者認識の基準は、人を思うという点においてすばらしい基準であるが、「敬」や「信義」を伴わないと「和」の実現には至らなくなるのである。このように「易地思之」や「思いやり」に「敬」や「信義」の念をしっかりと取り入れることにより、内の社会の論理として働いてきた両文化の基準が異文化間の基準としても機能を持つことになると思う。すなわち、異文化間の「和」の実現のためには、うちなる「和」の領域を広めることであり、互いに横の関係の「敬」や「信義」に基づいた他者認識の基準が求められる。すなわち、地域構成員同士の敬や信義の確立が先決の課題と言えよう。

4. ホスピタリティ・コミュニケーション教育のあり方

ホスピタリティ・コミュニケーションとは、「人間同士が言語・非言語媒体を通して、知・情・意の側面を伝達しあう相互作用の総称」で、「双方の間に優劣・高下がなく、その場の相互間に生じる各種の影響が穏やかで、物事のそうあるべき道筋に当てはまっていることを指す。また、やり方、もののいいぶり、身のこなし方などに、自分に比べて相手の立場や気持ちを理解しようとする心が、注意深く行き届くようにすること」である。⁶⁾

日本語の持つコミュニケーション機能は、全

てホスピタリティ・コミュニケーション機能に当たるが、中でも、文化色の強い機能ほど、ホスピタリティ・コミュニケーションに与える影響力が大きい。中でも文化色の目立つ言語機能を見ると、あいさつ、相槌、うなずき、遠慮、話題のやり取り、敬語などホスピタリティ的な機能が多い。すなわち、日本語はホスピタリティ性の強い言語と言える。

江戸時代の町人階級や寺子屋でのそろばんや「商家往来」のような教育内容からも分かるように商業との関わりも目立つ。

ホスピタリティ・コミュニケーション能力の場合、単にコミュニケーション能力のみならず、対人関係におけるリスペクトの念や福祉・介護の理念についての理解や思いやりのある態度の育成が大事である。ホスピタリティ日本語教育は、ホスピタリティ・マネジメントを目指しているホスピタリティ産業のためにも望ましい理念である。この理念は、1998年ごろ徳川宗義教授が韓国日本学会学術大会などの講演会で提唱した福祉言語学（welfare linguistics）の精神でもあり、21世紀に入ってから至る所で関心が寄せられているWellbeing的生活観にも通じる。ホスピタリズムは、言語の大事な機能の一つとして、言語教育の理念として設けるのも望ましいと言える。

5. 「和」のための日本語教育に求められるもの

以上述べてきたように、日本語には、「和」を実現するに有効な「和」や「思いやり」のようなホスピタリティ性が目立つ。それだけ長い間、共同体の「和」の実現に役立っていたに違いない。そのゆえ、日本語教育では、日本語のこのような特徴が生かされなければいけない。

しかし、共同体論理としての「和」を強調しすぎると、「いじめ」という副作用も避けられない恐れもあり、コミュニタリアンに陥り、個の価値観に基づいた判断を妨げる傾向さえありうる。こ

のような副作用を乗り越え、より広い文化圏における「和」の認識を共有するためには、地域内構成員同士の「信義」を取り戻すことであり、アイデンティティ形成の基盤をなすべきコミュニティの領域を地方、国、民族という単位より、もっと広く捉えるための認識の変化が求められる。

同じく、異文化理解や異文化間の和を目指す外国語教育において最も力を入れるべきことは異文化に対する「敬」の念を持たせることである。従来のような単一民族的認識や民族的優越感など、異文化間の和の実現を妨げるような自文化中心主義の限界を乗り越え、他文化への「敬」の念を基にした多文化主義への意識転換が求められる。その意識転換のためには、とりあえず自文化内の、とりわけ自分の周りから異文化的要素を見つけることにより、文化の多様性や階層性に目ざませることである。見方によっては自分の周りの全てが異文化であることの認識の転換が望ましい。異文化という新しい階層に接する前に、内なる社会における異文化の認識と多様な接触による国際化教育を進めることにより、多文化・多民族的教育へ拡大していくと思う。自文化内の多様性や階層性を客観的に眺めることにより他の文化についても自文化同様に理解できるように教育すべきである。

様々な階層の異文化に対する「リスペクトの念」を身につけさせるためには、異文化との接触や協働学習のような多様な交流を通じての体験学習が望ましい。すなわち、異文化理解の教育には、交流という教授法を積極的に取り入れるのが望ましい。同時に、国際理解教育は、異文化理解に止まらず人類の文化一般に対する理解ができるように教養教育化が求められる。外国語学習者に異文化間の「和」の実現に役立つ能力を持たせるということは、多文化主義的な広域専門家の養成につながる。外国語教育が言語記号の置き換え技能の習得に止まらず、異文化間の「和」の実現に向けての多様な能力を身につけることのできる教育になってほしい。

そのような教育的効果を納めるためには、従来のような言語記号の運用能力だけでなくリスペクトの念に基づく多文化間交流能力、異文化適応能力、問題解決能力などが求められる。これだけの能力を育てられるためには、外国語教育学の立ち上げが求められる。応用言語学としての外国語教育ではなく、教育学としての外国語教育の体系付けが必要である。取り分け、「広域外国語教育学」の構築⁷⁾が望ましい。広域外国語教育学とは、言語学・応用言語学・教育学・社会学・心理学・文化学などを融合した学際的領域にわたる学問を指す。これからの外国語教育は、このような領域の広い学問的知識の蓄積に基づいた多文化主義的広域専門家の養成に向けて一層の力を入れていくべきであろう。

【注】

- 1) Schutz, W.C.(1958) " FIRO; A Three-dimensional theory of interpersonal behavior" . N.Y.; Rinehart & Co. Inc. (Donelson R. F.(Hong, S.Y.訳;1991)『集団力学』ソウル;良書院, pp.72~73から再引用)
- 2) 本稿で用いる「和」の意味には「大和」の意味は含まれていない
- 3) 洪顕吉他 (2002)『日本思想の理解』、ソウル;時事日本語社 p.52
- 4) 小林薫 (1980)「職場の人間関係」(南博編『日本人の人間関係事典』東京;講談社 pp.211-229に所収) p.216
- 5) 小松左京 (1980)「日本人の人間関係」(南博編『日本人の人間関係事典』東京;講談社 pp.30-31に所収) p.30
- 6) 李徳奉 (2010)「ホスピタリティ日本語の特徴と教育のあり方」『2010年台湾応用日本語国際学術シンポジウム要録』 p.32
- 7) 李徳奉 (2007)「広域日本語教育学構築の必要性」『韓国日本語教育学会第47回国際学術発表大会要録』 pp.13-16

【参考文献】

- 石井敏 (2001)「異文化コミュニケーション能力とは何か」『獨協大学外国語教育研究』 19
 石井敏他 (1987)『異文化コミュニケーション』、東京;

有斐閣選書

- 石井敏他 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、東京：有斐閣選書
- 李徳奉 (2007) 「広域日本語教育学構築の必要性」『第47回国際学術発表大会要録』韓国日本語教育学会
- 李徳奉 (2008) 「日本語教育広域化の構想」(第7回日本語教育学世界大会要録)
- 李徳奉 (2010) 「ホスピタリティ日本語の特徴と教育のあり方」『2010年台湾応用日本語国際学術シンポジウム要録』 pp.26-37
- 小林薫 (1980) 「職場の人間関係」(南博編『日本人の人間関係事典』東京：講談社pp.211-229所収)
- 小松左京 (1980) 「日本人の人間関係」(南博編『日本人の人間関係事典』東京：講談社pp.30-31所収)